『ひとりではなかった』

ひじり在宅クリニック　院長　岡本 拓也

綾子さん(仮名)は、町営住宅に一人住まいをしていた。いや、むしろ正確には、一人と二匹住まいと言うべきかもしれない。二匹というのは小型の室内犬親仔。親犬の方は既に相当の年寄りで、遠からぬ将来寿命が尽きるであろうことが一見して明らかだった。仔の方もかなり弱っていて、綾子さんの話によると、仔は心臓に重症の持病を抱えていた。そんなわけで、親仔でヨタヨタ歩く姿は、哀れを誘うものがあった。綾子さんも進行癌の終末期にあったので、そこに住む一人と二匹はいずれもが終末期にあったと言える。弱いもの同士がお互いの存在に支えられ合いながら、懸命に日々を生きていた。綾子さんが二匹に向ける慈愛と哀しみに満ちた眼差しには、そこはかとなく人の心を打つものがあった。自分が先か、犬たちが先か、綾子さんは直腸癌と診断された3年前からそのことをずっと気にしていたのかもしれない。

綾子さんと二匹が住む町営住宅を初めて訪問したのは、綾子さんが70歳の誕生日を迎えて間もない頃だった。それに先立つ5年ほど前、私がホスピス長として勤務していた洞爺温泉病院緩和ケア病棟で主治医として関わらせていただいた患者さんの奥さんが綾子さんだった。「先生、その節はたいへんお世話になりました」と言って、綾子さんは再会を喜んでくれた。もっとも、状況を考えると手放しで喜んでいるわけにもいかないことは、綾子さんもよくわかっていたはず。

綾子さんが淹れてくれたお茶を飲みながら、私は当時のことを思い出していた。綾子さんは車を運転しない人だったので、隣町からバスを乗り継いで、結構な時間をかけて毎日いそいそと夫の元に通っていた。病院最寄のバス停は病院が立つ場所からかなり長く急な坂を下った所にあったので、いつも息を切らしながらその坂道を上り下りして、綾子さんは入院中の夫に会いに来ていた。綾子さんは少女のような人だった。

その夫が遺影の中から微笑みかけてくれている仏壇が置かれた部屋に綾子さんのベッドもあり、綾子さんはそこで寝起きしていた。歩いたり話したりする姿をもはや肉眼では見ることができない夫ではあったが、その部屋には夫の確かな存在があった。しばらくすると、綾子さんはそのベッドから一歩も動けなくなった。綾子さんがそんな状態になってからも、あいかわらず写真の夫は幸せそうな笑顔を綾子さんに向けてくれていた。ベッドのすぐ傍のカーテンの開け閉めすら自分ではできなくなっても、綾子さんは入院することを頑として拒み、あくまでもその部屋に居ることにこだわり続け、その意志を貫き通した。

私が訪問診療に入り始めた頃、つまり綾子さんがなんとかまだ一人で動けていた頃、綾子さんは犬たちについて、「この子たちは私が生きているうちに獣医さんに頼んで安楽死させるつもりなの」と、覚悟を決めた厳しい眼差しで話してくれていた。しかし、そのひと月ほど後、犬の世話ができないどころか自分の世話すら十分にはできなくなってしまった綾子さんは、「ワンちゃんたち、どう…しましょうかね…」と私が遠慮がちに尋ねても、ただ「そうねえ…」と伏し目がちに繰り返すだけで、それ以上の返事が返ってくることはなかった。やはり今のような状態となっては、せめて犬たちに傍にいて欲しいのだろうと察して、「わかりました。綾子さんに何かあったときは、こちらでなんとかします。大丈夫です」と伝えた。綾子さんは寂しく微笑んで頷いた。綾子さんが生きているうちに、仔の方が亡くなった。綾子さんがそのことに気付いたかどうかはわからない。親犬の方は綾子さんが亡くなった後も生き延び、綾子さんの義兄であるらしい人が引き取ってくれた。

綾子さんの最期の日々、親族との関わりはほとんどなかった。綾子さんは親族とは長らく距離を置いて暮らしてきた人だった。ようやくのことで綾子さんの姉と義兄が来てくれたので、ケアマネと訪問看護師と私と一緒に集まり、綾子さんの現状を説明し、今後のことについて話し合った。その時点で綾子さんはいつどうなってもおかしくない状態だった。実際、その話し合いが持たれた日の夜、綾子さんは一人で逝かれた。写真の中で微笑む夫が見守る部屋で。

綾子さんのご遺体は、献体すべく綾子さんが自分でその何ヶ月か前に入会の手続きを済ませていた北海道大学医学部白菊会に引き取りに来てもらった。町営住宅での二人と二匹の生活のすべてが、その日、終わった。